

心理學の新傾向

八

文學博士 松本亦太郎

本篇は大正十四年十一月廿日の東京日日新聞學術欄上に掲載せられたものであります。心理學の大家松本博士のお話でありますから吾々保育關係者の參考となりますから特に全文を轉載することにいたしました。

現在の心理學の傾向を見ると、その研究に二つの方向がある。即ちその一つは心的作用を分解して簡單なるものに分類し、その單元になるものを見出して、それがどういふ具合に結び付いて複雑なるものが出来るかといふ、分解的でもしかも構成的な研究法である。従來の精神物理學、或は實驗心理學、または少し以前に英國で研究せられた聯想心理學などは矢張りこの傾向に屬する。

今一つの傾向は、心的現象を分解的に見ないで、全體としての心は如何に進展して行くかといふ立場からの研究である。詰まり心的現象を全體状態と見、夫れを基礎として、心の機能の方を研究して行く方法である。この方では自然に考へ方が動力的になつて、働いて行くといふ形でもつて心の働きを見て行くのであるが、大體の傾向をいふと、総合的に心的状態を崩さないで研究して行かうといふ方法である。

□
即ち心理學の研究は、分解的構成的心理學と、全體的機能的心理學との二つに分れ、それが互に對抗し、或は競つて來たのである。

今これを人について見ると、全體的機能的心理學の見方をする者は、フランスの心理學者には少くない、リボー、ビネー、或はベルグソンなどはさういふ傾向に屬する。米國において、ジエームスなどは機能的心理學の立場に立つてゐる。同じ學統を引いてゐるエンジェルの如きも機能的心理學を唱道した。又埃國のグラッツ學派に屬する心理學者は、心的現象を全體として考へんとしてゐる。

最近ドイツの心理學者で全體的心理學の方向において新機軸を出しはじめたのは、ベルリン大學にゐるウエルトハイマー及びケーラー、なほ一人はギーセン大學にゐるコフカの三人であつて、これ等の人々が形態心理學を説きはじめたのである。形態説とは、心が働く時に、一つの全體としての形になつて働いてゐる、心の働きは形態の系列である、といふのである。形態心理學では、心の働きを動力的に見て、その見地から心の働く法則を探索しやうとする。心を形態的に見ることはグラッツ學派ですでに考へてゐたが、ドイツの方で夫れを新に考へ直しつゝあるのである。而して形態論者は、從來の構成的分解的心理學に代ふるに形態的綜合的心理學を以てしやうとの氣概をさへ示してゐる。

□

兎に角かういふ二つの流れがあつて、學者が互に是非を争つてゐるが、併し大體心理學の發展といふ廣い立場から見ると、この二つの方向の研究はいづれもその發達に貢獻してゐる。

この二つの研究方面が實生活に結び付いて夫々の効果を擧げつゝある。能率心理學とか、人間工學とか、實業心理學とかいふ様な學問は米國にその起源を發して、その流れは更にヨーロッパに渡つた。實際生活に心理學上の研究を結び付けて、人間の活動を整理して行かうと努力しつゝある。

例へば工場内の仕事とか、交通機關の運轉とか、實務上の仕事とかいふやうな實生活における種々な方面の働きを科學的の根據に従つて整理してその効果を増進せしめんとするのである。或は職業を分解的に研究し、又人々の智能技能を個々の要素に分解して検査しその人が其仕事に適するか否かを考へて仕事を處理して行かうとしたり、能率を増進するやうに作業法を改良したりする。斯る方面の工夫や仕事は心理學の分解的、構成的の研究が基礎になつて出て來た。人間を力と見てその力の作業能率を増進させやうとする方面は分解的、構成的の研究が基礎になつてゐる。